

令和元年度 学校評価計画表

五條市立野原小学校

		おもいやり等の心をはぐくみ、深く学び、やりぬく子どもの育成				総合評価
運営方針		学校教育目標及び「めざす学校像」「めざす児童像」の具現化を図るために、教職員一体となって共通理解のもと、家庭や地域との連携を図りながら、PDCAを意識した教育実践に取り組む。				
平成30年度の成果と課題		本年度の重点目標	具体的目標			B
○ICTを活用し効果的な教材提示によって、視覚的にわかりやすい授業が展開できた。 ○ふるさと学習を通して、自分たちの地域の新しい側面を見つけ、楽しんで学ぶことができた。 ○図書館を活用して、教材に即した並行読書二取組教材の深い読みにつなげることができた。 ○保幼小中の職員間の交流授業を通して、互いの情報を共有することができた。 ●話し合い活動を授業の中で取り入れてきたが、表面的な話し合いにとどまり、意見を比較し自分の考えを深めるまでには至っていない。 ●個に応じた支援や放課後勉強会を実施したが、基礎・基本の力の向上については課題が残る。 ●外遊びチャレンジを計画的に実施することはできたが、全体的に体力向上につなげることができなかった。		◎、主体的に学ぶ力を向上させ「確かな学力」を身につける。	○ 基礎・基本の力を確実に身につけ、対話的な活動(交流)を通して、学びを深めることができる。			
		◎自分や地域の良さに気づき、思いやりの心を育む。	○ 自ら計画を立て、家庭学習(自主学習)の習慣や読書習慣を一層身に付ける。			
		◎心身の健康増進と運動能力を向上させる。	○ 自分の良さや思いを理解し、思いやりを素直に出し合い、人とのつながりを大切にすることができる。			
			○ ふるさと学習の取組を計画的にすすめ、ふるさとに学び、ふるさとを愛する思いをもつことができる。			
	○ 自ら進んで基本的な生活習慣や集団でのきまりを身に付けることができる。			○ 自分の課題を明確にし、課題に応じた活動を計画的に取り入れて、体力や運動能力の向上に根気強く取り組むことができる。		
評価項目	具体的目標(評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果	成果◎と課題●(評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価(結果・分析)及び改善方策
主体的に学ぶ力を向上させ「確かな学力」を身につける。	A 基礎・基本の力を確実に身につけ、対話的な活動(交流)を通して、学びを深めることができる。	基礎・基本の力を確実に身につけ、ICT等を活用して、児童が分かる喜びを味わえる授業をおこなう。児童の自己評価で90%の達成率を目指す。	B	◎授業の流れ(めあて～まとめ)を全学年で統一して実施できるようになった。 ◎児童の学習の様子や成果を共有・発信することで児童の学習意欲が高まった。 ●ICTを活用しているが、楽しさにつながるような効果的な活用とICT機器の整備、充実が必要である。	・ICTや交流の適切な活用の仕方を考える。ICT支援員に提案してもらう。 ・発達段階に応じた話し合いの型を作成する。 ・ICT機器の効果的な活用方法についての研修を行う。	・自己評価は厳しいが、授業を参観させてもらって、グループ学習を取り入れるなど、わかる授業を実践し、基礎・基本の定着が感じられる。 ・読書活動を通して、児童が感じたことを書き留めていく活動を取り入れることで読む力がさらに高まる。 ・幼稚園、保育所では読み聞かせの時間を設けて、子どもたちの読書への関心を高めている。小学校でも継続した取組を進めいく必要がある。 ・教職員一人一人が、児童の読む力、読書力向上を意識した取組を意欲的に進めていく必要がある。
	B 自ら計画を立て、家庭学習(自主学習)の習慣や読書習慣を一層身に付ける。	児童の発達段階に応じた家学(自主学習)の方法を「家庭学習の手引き」等を活用して示し、自ら課題を見つけ、計画的に学習に取り組めるようにする。児童の自己評価で80%の達成率を目指す。家庭学習の取組について、中学校との連携を図る。	B	◎交流する機会が作られており、児童も話し合いをする意欲がある。 ◎ペア・グループなどで意見交流し、多様な意見にふれ、考えを広げることができた。 ●楽しんではいないが、深めたり、広げたりするところまでは不十分。 ●発達段階に応じて、話し合いの仕方を指導していかなければならない。	・自学のやり方を学校で統一して徹底させる。 ・発達段階に応じて、自分の課題の見つけ方を教える。 ・良いノートを掲示するなどして、児童の意欲を高める。 ・家庭学習の手引きの内容を見直し、より活用しやすくする。 ・図書館司書との連携について年度初めに計画を立て、授業等で効果的に関わってもらえるようにする。	
	B 図書館司書と連携して、授業の中で図書館を効果的に活用する。読書の楽しさを味わう機会をつくり、一人一人の読書の目当てを明確にして家読(うちどく)を推進していく。児童の自己評価で20分以上、週2回以上の図書館の利用が60%の達成率を目指す。	図書司書と連携して、授業の中で図書館を効果的に活用する。読書の楽しさを味わう機会をつくり、一人一人の読書の目当てを明確にして家読(うちどく)を推進していく。児童の自己評価で20分以上、週2回以上の図書館の利用が60%の達成率を目指す。	B	◎自学する習慣は身に付いてきている。 ◎家庭学習に意欲的に取り組んでいる。 ●宿題としない提出しないので、意欲の高まりにつながるような取組の工夫が必要である。 ●取組みはできたが、児童の自主性や計画性の向上には欠ける。	◎絵本村の開催や並行読書での連携によって児童が本に親しむ機会を確保できた。 ◎教室に本を準備してもらい、ふれる機会は増えた。 ●図書館司書との連携を図り、休み時間に図書室へ行く児童が増えるような取組の工夫が必要である。	
自分や地域の良さを意識し、思いやりの心を育む。	C 自分の良さや思いを理解し、思いやりを素直に出し合い、人とのつながりを大切にすることができる。	アンガーマネジメントの取組を計画的にすすめ、自分を理解し、自分の良さに気づかせることで、自己有用感を育てる。	B	◎保健室でも気持ちシートを利用して自分の感情を考える機会を作っている。 ◎気持ちシートにより、毎日感情を表現する機会を確保できた。 ◎学級指導でもアンガーマネジメントの手法をとり入れ、気持ちの理解を促すことができた。 ●各学級によって温度差があり、取組の内容にマンネリ化がみられる。	アンガーマネジメントの手法にこだわらず、児童の実態に応じた手法を取り入れていく。 ・教職員が率先して子どもに対して大きな声で笑顔で挨拶をする。 ・あいさつをしている児童の表彰等により意欲向上を目指す。	
	D ふるさと学習の取組を計画的にすすめ、ふるさとに学び、ふるさとを愛する思いをもつことができる。	児童会を中心として挨拶運動を行い、児童一人一人が挨拶の大切さに気づき、どこでも誰に対しても進んで自分から挨拶ができる。児童の自己評価で80%の達成率をめざす。	A	◎全体的にできてきている。 ◎公の場で丁寧な挨拶が出来ている。 ●挨拶運動をしている間はできるが、継続性がない。 ●誰に対しても進んではいない。	・身近にある気付いていない地域の良さにふれる機会をつくる。 ・地域の人を活用してさらにふるさとに気づくようにする。 ・学校全体として事前の計画を立て、6年間を通して、系統的な取組をする。	
	B 学年に応じて、活動の計画を立て、地域に出かけ、実際に見たり、聞いたり、触れたりすることで、ふるさとに気づくことができるようにする。	「野原十八景」の取組を中学校と連携して行い、ふるさとの魅力を互いに発信、共有することで、ふるさとを愛し、自慢したいという思いをさらに深められるようにする。児童の自己評価で80%の達成率を目指す。	B	◎学年に応じて活動の計画を立てることが出来た。 ◎地域の公共施設への訪問や五條市の歴史についての学習を通して、ふるさとにふれる機会が確保できた。 ●地域の人を活用してさらにふるさとに気づくようにする。 ◎地域の良さを振り返る良い機会となった。 ◎中学校と連携できた ●実施したことを他学年に知ってもらう機会を作る。 ●連携は行えたものの、年度初めの計画や情報の共有、ふりかえりが不十分であった。	・生活調への結果をもとに、実生活にいかせる取り組みを行う。 ・保護者の方にも適切な生活習慣を知ってもらうよう啓発する(最適な睡眠時間等) ・生活調の実施回数を増やす。(家読とセットにするなど) ・「あすへ」について日常的な指導回数を増やし、何のために行うのかを考えさせる。	
心身の健康増進と運動能力を向上させる。	E 自ら進んで基本的な生活習慣や集団でのきまりを身に付けることができる。	基本的な生活習慣を自ら見直すことができるように、「生活調シート」を活用して、生活を振り返る場を繰り返しもたせる。児童の自己評価で80%の達成率を目指す。	B	◎自らの生活を振り返る良い機会となった。今後も継続して実施し、子どもたち一人一人が自分の課題を理解して、生活習慣の定着させていく。 ●実生活にいかせていない。 ●保護者の感想を漏れなく書いてもらい、連携を図る。 ●子どもの意識付けをするためには実施回数が少ない。	◎80%以上の児童が「あすへ」を意識して行動することができ、児童の規範意識が高まった。 ●特定の児童だけならべている。 ●日常的に指導する回数を増やし、習慣化できるようにする	
	F 自分の課題を明確にし、課題に応じた活動を計画的に取り入れて、体力や運動能力の向上に根気強く取り組むことができる。	「あすへ」(あいさつ、スリッパ、返事)の意識して、行動できるよう発達段階に応じた指導を繰り返し行う。児童の自己評価で80%の達成率をめざす。	A	◎毎学期の外遊びに参加し、体を動かすことが出来た。 ◎毎学期取り組むことができた。 ◎児童の自己評価の達成率が87%と高く、休み時間に外遊びをする児童も多い。 ●子どもたちが受動的になっている様子がある。 ●外遊びチャレンジは教師主導になっている	児童自ら、自分の課題を意識して、体力の向上に取り組むことができるようにさせる。(種目や記録の掲示) ・体力テストの結果を基に、学校全体で共通して取組運動等に継続して行い、苦手な部分を改善していく。	
	A 昨年度の体力測定の結果を考察し、児童の体力・運動能力の課題を明確にし、体力・運動能力向上に向けた、共通した取組を発達段階に応じて継続的に取り組んでいく。	昨年度の体力測定の結果を考察し、児童の体力・運動能力の課題を明確にし、体力・運動能力向上に向けた、共通した取組を発達段階に応じて継続的に取り組んでいく。	A	◎夏休みを利用して児童に自身のデータ分析をさせ、課題解決に向けた取り組みを行うことができた。 ●今年の結果をもとに児童一人一人が自分の課題を把握して、継続的な取り組みを考える。		
今年度の成果◎と次年度への課題●		◎ 授業の中にグループ活動を意図的に取り入れることで、児童の話し合いへの意欲が高まり、友だちの意見から自分の考えを広げることにつながった。めあてから振り返りまで、全学年、統一した授業スタイルで日々授業が展開できるようになった。 ◎ アンガーマネジメントの取組が定着し、学級指導等にも活用できた。 ◎ 挨拶の大切さを意識して、進んであいさつができる児童が増えてきた。取組が成果につながっている。 ● 家庭学習習慣定着に向けた取組を見直し、自ら課題をみつけ計画的に学習に向かう児童を育てる。 ● ふるさと学習については学年によって取組に偏りが見られた。学年に応じた教科、内容を系統的、計画的に取り組む必要がある。 ● 体力向上に向けて、各学年の体力測定の結果を分析し、児童の体力についての課題を明確にして教職員で共有する。さらには全学年で共通した取組を年間を通して行い、成果を検証する機会をつくる。				